


中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ①有形文化財の収集等 1) 有形文化財の収集 2) 寄贈・寄託品の受入れ等							
【年度計画】								
・ I-1-(1)-①-1) (東京国立博物館) ア ・ I-1-(1)-①-2) (4館共通) ア								
担当部課	学芸研究部列品管理課			事業責任者	課長 沖松健次郎			
【実績・成果】								
(東京国立博物館)								
・ 購入件数 8件 内訳：絵画 1件、彫刻 1件、東洋絵画 5件、東洋彫刻 1件								
・ 決算額 570,000,000円								
3年度は、絵画1件「泰西騎士像」、彫刻 1件「金剛力士立像」、東洋絵画 5件「千仏図」4件、「如来坐像」、東洋彫刻 1件「女神像」の計8件を購入した。								
(4館共通)								
新規寄贈品件数 81件								
内訳：絵画 4件、書跡 7件、漆工 5件、染織 1件、考古 3件、東洋絵画 4件、東洋陶磁 30件、東洋考古 27件								
新規寄託品件数 30件 内訳：絵画 2件、彫刻 13件、刀剣 13件、東洋彫刻 1件、東洋陶磁 1件								
・ 寄託品は新規に30件を受け入れた。返却30件のうち、16件は寄贈品として受理した。								
【補足事項】								
・ 彫刻購入品の「金剛力士立像」は、等身を超える大きさであり、天井が高く、広い当館の展示室での展示効果はきわめて大きい。修理記録映像も撮影しており、当館を代表する仏像として、展示、教育普及など様々な活用が期待できる。								
・ 寄贈品である染織分野の「有職雛飾り」は皇室や宮家・財閥などに多くの雛飾りを納めた近現代を代表する人形の老舗の技術が最も優秀であった時期の作品であり、由来の明らかな点、保存状態も良好な点など当館での活用が大いに期待できる優品である。								
・ 浅草寺からの寄託品である彫刻作品群は、平安時代から江戸、明治時代に至る様々な時代、様々な像種の作品で、これまで公開されることが少なかった仏像であることから展示効果が大きく、活用が大いに期待できる。								
								
				【購入品】 金剛力士立像 2躯				
【評価指標】 項目	3年度実績	目標値	評定		29	30	元	2
所蔵品件数	120,073件	-	-	経 年 変 化	117,460	119,064	119,871	119,942
うち国宝	89件	-	-		89	89	89	89
うち重要文化財	648件	-	-		643	644	646	648
収集件数	131件	-	-		268	1,606	807	71
うち購入件数	8件	-	-		12	31	11	1
うち寄贈件数	81件	-	-		84	72	28	52
うち編入件数	42件	-	-		172	1,503	768	18
寄託品数	2,651件	-	-		3,109	3,130	2,591	2,651
うち新規寄託品件数	30件	-	-		71	45	29	69
文化財購入費	570,000千円	-	-		252,720	146,840	279,200	200,000
【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】							
評定：B	購入作品はいずれも市場に出ることが稀なものであり、かつ展示効果の高い作品を購入できた。 寄託、寄贈は、浅草寺からの彫刻の寄託、個人からの近代雛飾りの優品の寄贈など、展示での活用が大いに期待できる 111 件を受け入れることができた。							
【中期計画記載事項】								
1) 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各博物館の収集方針に沿って、調査研究及び情報収集の成果、並びに外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。 (東京国立博物館) 日本を中心として広くアジア諸地域等にわたる美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。								
2) 収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。 また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。								
【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】							
評定：B	購入は、数こそ多くはないが、「金剛力士像」のように将来的に当館の仏像を代表できるような展示効果の高い重要な作品を購入できた。それにより中期計画の初年度として順調に計画を遂行できている。今後も各分野で情報を常に広く収集し、館で活用できる作品の購入を計画的に進めていく。 寄贈については、3年度は、ご所蔵者のご都合による寄託品からの切り替えも多かったが、従来も活用していた作品も多く、所蔵品となったことは意義が大きい。 寄託は研究員と所蔵者との縁から話が出た案件が多く、それらの中には浅草寺の仏像のように、今まで公開の機会が少なかった作品もあり、展示、研究に有益な活用が期待される。今後も縁を大事にして寄託の機会を増やせるように取り組んでいく。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ①有形文化財の収集等 1)有形文化財の収集 2) 寄贈・寄託品の受入れ等							
【年度計画】								
・ I-(1)-①-1) (京都国立博物館) ア ・ I-(1)-①-2) (4館共通) ア								
担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長 羽田聡					
【実績・成果】								
I-(1)-①-1) (京都国立博物館) ア ・ 購入件数 12件 内訳：絵画3件、金工1件、陶磁1件、漆工1件、染織6件 決算額 299,953,000円 ・ 3年度は、「重要美術品 住吉真景図巻 岡田半江筆」、「吉野・龍田図屏風 英一蝶筆」、「重要美術品 北野本地絵巻断簡」、「太刀 銘(菊紋)和泉守来金道/遥奉 鈞命享保庚戌年於京師二柄ヲ打一柄ハ献シー柄ハ則是也」、「褐釉撫四方茶入 野々村仁清作」、「木彫交椅」、「白平絹地銀胴箱に草花描繪団扇形散らし文様摺箔」、「紅絹縮地伊達紋繡小袖」、「白繻子地文字入花折枝文様繡帯」、「紺縮緬地海老文様友禅染掛袷紗」、「淡黄綸子地文字入松竹梅文箱文様繡掛袷紗」、「紫紹地花鳥虫籠文様繡振袖」を購入した。								
I-(1)-①-2) (4館共通) ア ・ 寄贈 新規寄贈品件数117件 内訳：絵画100件、彫刻3件、金工2件、陶磁11件、漆工1件 ・ 寄託 新規寄託品件数95件 内訳：絵画30件、書跡8件、彫刻1件、金工21件、陶磁1件、漆工26件、染織7件、考古1件								
【補足事項】								
I-(1)-①-1) (京都国立博物館) ア 中期計画に則り、時代や分野のバランスに配慮しつつ、真に国民の共有財産たり得る文化財を購入した。特に、「吉野・龍田図屏風 英一蝶筆」は、長らく所在不明であったが、研究員による調査過程で見出されたもので、壮年期の数少ない作品を代表する大作である。								
								
				吉野・龍田図屏風 英一蝶筆 6曲1双				
【評価指標】 項目	3年度実績	目標値	評定		29	30	元	2
所蔵品件数	8,279件	-	-	経年変化	7,977	8,075	8,130	8,150
うち国宝	29件	-	-		29	29	29	29
うち重要文化財	200件	-	-		202	196	200	200
収集件数	129件	-	-		184	98	55	20
うち購入件数	12件	-	-		12	12	24	9
うち寄贈件数	117件	-	-		172	86	31	11
うち編入件数	0件	-	-		0	0	0	0
寄託品件数	6,562件	-	-		6,235	6,434	6,520	6,547
うち新規寄託品件数	95件	-	-		79	232	149	43
文化財購入費	299,953千円	-	-	291,808	106,340	383,800	41,716	
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 京都文化のみならず、海外との深い関わりを示す作品も購入することができた。また、後世において京都文化を伝えるのに重要な作品群を寄贈していただいた。購入・寄贈については、各分野に担当研究員が尽力し、重要美術品を含む貴重な作品を収集する事ができた。							
【中期計画記載事項】 1)体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各博物館の収集方針に沿って、調査研究及び情報収集の成果、並びに外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。 (京都国立博物館) 京都文化を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。 2)収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 3年度は中期計画の初年度として、京都文化を中心とした美術作品について、収集方針に基づき、順調に購入することができた。 今後も文化財の情報収集に努め、調査、研究を進める事により、展示・研究に寄与する作品の購入等を順次行っていく予定である。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ①有形文化財の収集等 1)有形文化財の収集 2) 寄贈・寄託品の受入れ等							
【年度計画】								
・ I-1-(1)-①-1) (奈良国立博物館) ア ・ I-1-(1)-①-2) (4館共通) ア								
担当部課	学芸部	事業責任者	学芸部長 吉澤 悟					
【実績・成果】 (奈良国立博物館) ア 購入0件。理事長裁量文化財購入費は2年ごとの配分であり、3年度は当館の配分は無かったためである。 (4館共通) ア 寄託を受け入れたのは以下の7件である。 ・彫刻 3件：重要美術品「木造普賢菩薩坐像」 1軀(個人)、重要美術品「木造不動明王二童子像」 3軀(個人)、重要文化財「木造不動明王立像」 1軀(妙法院) ・書跡 4件：「大恵度経宗要」 1帖(本證寺)、「十誦律 卷第四十六(神護寺経)」 1卷(慈眼寺)、「大毘盧遮那成佛神変加持经 卷第六」 1卷(個人)、「若宮祭礼田楽頭屋助報日記(元和四年)」 1冊(個人) 編入した作品は以下の1件である。 ・絵画 1件：「東大寺大仏蓮弁線刻図模本 宮原柳僊筆」 1幅								
【補足事項】								
<p>・彫刻部門で寄託品として受け入れた「木像普賢菩薩坐像」、「木造不動明王二童子像」の2件は、古写真類の調査により、かつて吉野山櫻本坊に伝来し、明治時代の神仏分離により吉野を離れたものであることが判明した。奈良ゆかりの作品であり、また文化財保護の歴史の観点からも高い展示効果が期待される。また妙法院所蔵「木像不動明王立像」も、なら仏像館での高い展示効果が期待される</p> <p>・書跡部門で寄託品として受け入れた「大恵度経宗要」は、鎌倉時代の著名な東大寺学僧、宗性の書写した仏教典籍として貴重である。宗性の自筆写本・関連資料は「東大寺少将筆聖教並抄六本」として東大寺に所蔵され、重要文化財に指定されているが、巷間に出たものも少なからず存在し、本品もその一例である。</p> <p>・絵画部門で編入した「東大寺大仏蓮弁線刻図模本 宮原柳僊筆」は、かつて模写として作成されたのち、長らく登録等がなされていないものであったが、館内外の展覧会等における活用が期待されるため、館蔵品への編入を行った。</p>								
								
				木像普賢菩薩坐像		大恵度経宗要		
【定量的評価】	項目	3年度実績	目標値	評価	29	30	元	2
収藏品件数		1,930件	-	-	1,893	1,908	1,911	1,929
うち国宝		13件	-	-	13	13	13	13
うち重要文化財		114件	-	-	113	113	114	114
収集件数		1件	-	-	7	15	3	18
うち購入件数		0件	-	-	6	6	3	10
うち寄贈件数		0件	-	-	1	9	0	8
うち編入件数		1件	-	-	0	0	0	0
寄託品件数		1,956件	-	-	1,962	1,974	1,974	1,988
うち新規寄託品件数		7件	-	-	12	18	8	26
文化財購入費(千円)		0円	-	-	550,000	101,564	100,440	284,500
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】						
評価：B		彫刻の新規寄託品2件は重要美術品であり、また書跡の新規寄託品2件もすでに重要文化財に指定されているものの一具であるなど、質の高い作品の受け入れを進めることができている。						
【中期計画記載事項】								
体系的・通史的にバランスのとれた所蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各博物館の収集方針に沿って、調査研究及び情報収集の成果、並びに外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。 (奈良国立博物館) 仏教美術及び奈良を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。								
【中期計画に対する評価】		【判定根拠、課題と対応】						
評価：B		中期計画の初年度として、3年度は、当館の柱である仏教美術作品の受け入れを行い、また、初めて編入を行った。時代も、平安時代、鎌倉時代、江戸時代、そして奈良時代作品の模写と幅広く、また、奈良にゆかりの深いものが含まれるなど、バランスの取れた収集であり、既に収蔵されている作品と関連付けることで、研究・展示において積極的な活用が期待される。以上のことから、中期計画を十分に遂行できていると判断した。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ①有形文化財の収集等 1) 有形文化財の収集 2) 寄贈・寄託品の受入れ等							
【年度計画】								
<ul style="list-style-type: none"> ・ I-1-(1)-①-1) (九州国立博物館) ア ・ I-1-(1)-①-2) (4館共通) ア 								
担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長	原田あゆみ				
【実績・成果】								
(九州国立博物館)								
ア 21件の文化財を購入した。								
<ul style="list-style-type: none"> ・ 内訳：絵画2件、書跡2件、金工2件、染織2件、考古11件、歴史資料2件 <p>絵画分野では、江戸時代の洋風画の展開を考える上で欠かすことのできない安田雷洲の作品を収集したほか、書跡分野では鎌倉時代の施入銘のある宋版大藏経を購入した。いずれも、当館がテーマとして掲げる文化交流を視覚的に示すことのできる作品である。染織分野において、これまで当館が所蔵していなかった江戸時代の小袖を購入した。稀少であるとともに展示効果も高い作品である。</p>								
(4館共通)								
ア 56件の寄贈、40件の新規寄託があった。								
<ul style="list-style-type: none"> ・ 寄贈の内訳：書跡4件、金工7件、陶磁2件、染織1件、考古38件、民族資料4件 <p>書跡3件は、現代の書壇を代表する仮名書家の一人で、書分野で女性初の文化功労者となった小山やす子(1924-2019)の作品である。陶磁分野でも、重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定された中島宏(1941-2018)の「青瓷彫文壺」を受贈するなど、将来的に当館を代表する作品となりうるものを収蔵することができた。</p> <p>同じく陶磁分野では、江戸時代・18世紀前半に有田で作られた古伊万里の大皿「色絵花盆図大皿」を受贈した。欧州輸出向けの古伊万里の中でも作行・状態ともに優れた作品である。考古分野では、日本の出土品ばかりでなく、オホーツク文化(北海道北東部)や朝鮮半島など、幅広い地域のバラエティ豊かな作品を受贈した。</p>								
<ul style="list-style-type: none"> ・ 寄託の内訳：絵画1件、彫刻20件、金工1件、染織14件、考古2件、民族資料1件、歴史資料1件 <p>彫刻分野では、個人所蔵のパキスタン・ガンダーラ地方の石彫19件を受託した。古代アジアの仏教美術の展開を示す上で好適な作品であり、館蔵品の不足を補うものとして重要である。</p>								
【補足事項】								
3年度に収蔵、受託した作品については、その一部を4年度内に当館での特別展のほか、文化交流展における寄贈者頭彰室及び新収品展において公開する予定である。								
【定量的評価】	項目	3年度実績	目標値	評価	29	30	元	2
収蔵品件数		1,489件	-	-	878	1,164	1,279	1,412
うち国宝		4件	-	-	3	4	4	4
うち重要文化財		44件	-	-	39	41	42	44
収集件数		77件	-	-	295	286	115	133
うち購入件数		21件	-	-	34	105	49	49
うち寄贈件数		56件	-	-	261	181	66	84
うち編入件数		0件	-	-	0	0	0	0
寄託品件数		1,344件	-	-	934	931	1,300	1,309
うち新規寄託品件数		40件	-	-	45	7	432	50
文化財購入費		231,117千円	-	-	640,636	907,943	461,396	584,156
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】						
評価：B		文化交流を基軸に据えた館蔵品、寄贈品、寄託品の受け入れをバランスよく行うことができた。いずれも質量ともに充実しており、当館のコレクションの充実寄与するものである。						
【中期計画記載事項】								
1) 体系的・通史的にバランスのとれた所蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各博物館の収集方針に沿って、調査研究及び情報収集の成果、並びに外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。 (九州国立博物館) 日本とアジア諸地域等との文化交流を中心とした、美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。								
2) 収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。								
【中期計画に対する評価】		【判定根拠、課題と対応】						
評価：B		中期計画の初年度として、日本とアジア諸地域等との文化交流を視覚的に示すことのできる作品を収集の基軸ととらえ、収集活動を継続的に行った。 寄贈・寄託については、収蔵品の不足を補うものを中心に、所蔵者へ働きかけるとともに、慎重な事前調査・検討を行った上で受贈をした。3年度に収蔵・受託した作品は当館で積極的に活用できるものばかりで、その中にはコレクションの核となるものも含まれる。						



(寄贈) 色絵花盆図大皿

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(1)有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の管理・保存・修理等 1)有形文化財の管理		
【年度計画】 ・ I-1-(1)-②-1 (4館共通) ア、イ、ウ (東京国立博物館) ア～キ			
担当部課	学芸企画部博物館情報課 学芸研究部列品管理課	事業責任者	課長 今井敦 課長 沖松健次郎
【実績・成果】 (4館共通) ア 新規収蔵庫の棚、セキュリティ等の詳細を確認し、収蔵庫運用ルールを定めたくえで運用を開始した。また、新規収蔵庫の空調及び扉の初期不良と、本館収蔵庫の収納棚、資料館収蔵庫並びに法隆寺宝物館の扉の劣化に対し、改善、補修を行った。 イ 3年度は748件の寄託品について所在確認作業を行い、収蔵場所の確認・更新を行った。 ウ 収蔵品等に関し、新規にデジタル撮影した画像は、画像管理システムに随時登録し、データ整備を推進した。あわせて、文化財情報システム(業務システム)の運用を継続し、収蔵品データを更新した。 (東京国立博物館) ア 未整理・未登録であった刀剣2件、漆工5件、染織22件、考古1件、陶磁4件、東洋陶磁2件、東洋染織2件、東洋民族4件を収蔵庫の移転作業等により、列品として編入を行った。 「石製小玉」(J-35010) 1件につき、台帳上の員数修正を行った。 九州国立博物館に長期管理換されていた作品の返却に伴い、43件の収蔵品について情報調査を行った。 松方浮世絵コレクションのうち2,155点の作品情報を更新し、文化財情報システムに登録した。 イ 古写真・ガラス乾板・館史資料等の旧資料部関係品を整理し、列品として編入活用・公開するための作業を継続して行った。また、2年度に一部編入した「万国写真帖(全21巻)」の残り12件1,374点を編入した。 ウ 「protoDB:列品管理プロトタイプデータベース」(学芸業務支援システム)で更新されたデータを「ColBase:国立文化財機構所蔵品統合検索システム」に自動的に反映する機能を継続して運用した。また、protoDBへ新たに「作品種別」の入力を追加すると共に、全ての機能についてユーザーログインを必須として、情報セキュリティの向上を図った。 エ 本館で保管している収蔵品等の文化財管理棟への移転業務に伴い、「収蔵品データ管理システム」に新たにデータ項目を追加することで、列品にかかる統計業務のさらなる効率化と情報の利活用向上を進めた。 オ 収蔵する和古書・洋古書について、10,215件のデジタル撮影を行った。 カ デジタル化済みのガラス原板撮影画像701件を「画像管理システム」に登録した。 キ 2年度から引き続き収蔵品等(陶磁、金工、刀剣、漆工、考古、民族)の移転作業を継続し、3年度分として計10,119件の移転が完了した。また、移転に伴い変更となった収蔵品等の所在情報について継続して確認し、「列品管理プロトタイプデータベース」及び「収蔵品データ管理システム」の情報を更新した。			
 <div style="margin-left: 20px;"> <p>[編入] 武人埴輪模型 吉田白嶺作 大正元年(1912) 3個</p> </div>			
【補足事項】			
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 収蔵庫の設備の充実のための作業、収蔵品等の確認作業を実施した。古写真資料等も継続して編入を行い、約15,000点のうち7,629点まで編入作業が進んだ。 新型コロナウイルスの影響により、撮影費の削減と時間を短縮しての業務を余儀なくされたため、資料等のデジタル化件数は目標を下回った。本館で保管している収蔵品等の文化財管理棟への移動作業については、順調に進めることができた。	
【中期計画記載事項】 国民共有の貴重な財産である文化財を永く次代へ伝えるため、収蔵品等の管理を徹底し、特に収蔵品等の増加に伴い収蔵に必要な施設設備の充実、改善を図る。また、収蔵品等の現状を確認の上、(中略)展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。			
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 文化財に適した環境とするため各収蔵庫の改善をし、収蔵品等・未登録品の確認・整理を行った。 画像データを継続的に蓄積するとともに、文字データの整備を推進し、業務や調査研究に役立てた。和古書・漢籍・洋古書のデジタル撮影も、前中期目標の期間の実績以上とすることができ、中期計画の初年度として、計画を順調に遂行できている。	

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の管理・保存・修理等 1) 有形文化財の管理		
【年度計画】 ・ I-1-(1)-②-1) (4館共通) ア、イ、ウ、(京都国立博物館) ア、イ			
担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長 羽田聡
【実績・成果】 (4館共通) ア 金工の適切な保管を目的として、刀袋等を購入した。 イ 6月と12月に実施する寄託品の継続手続きにあわせ、寄託品の所在確認作業を行った。 ウ 収蔵品及び展覧会展示作品等の新規撮影は、デジタル撮影を7,025件(カット)行った。収蔵品のデジタルデータを作成し、収蔵品管理システムへ登録を行い、画像資料の充実を図った。(3年度画像資料登録件数:17,146件)(京都国立博物館) ア 収蔵品写真等、既存フィルムを6,338件、デジタル化した。 イ ・中期計画の初年度として、収蔵品管理システムにおける課題及び改善点をまとめ、他施設のシステムを参考とするため情報収集をした。収集した情報をもとに、仕様書を策定し、システムリニューアルに取り掛かった。 ・CMS(ウェブサイト更新に使用するシステム)へ活用可能な、HTMLを自動作成する機能実装について業者と打合せを行った。			
【補足事項】 (4館共通) ウ ・当館の展覧会出品作品の撮影は、特別展「特別展 京の国宝一守り伝える日本のたから一」(7月24日～9月12日)、特別展「畠山記念館の名品―能楽から茶の湯、そして琳派―」(10月9日～12月5日)を対象として進めた。 ・特別企画「オリュンピア × ニッポン・ビジュツ」(6月5日～7月4日)、特集展示「後期古墳の実像 ―播磨の首長墓・西宮山古墳―」(1月2日～2月13日)など特集展示・特別企画のため、作品の撮影を行った。 ・龍光院を調査し、作品の撮影を行った。(処理番号1411B7参照) ・東福寺・知恩院等社寺を調査し、作品の撮影を行った。 ・収蔵品等の撮影を行い、資料の充実を図った。 (京都国立博物館) ア ・当館職員によるスキヤニング作業を積極的に行い、フィルムのデジタル化を促進した。また、デジタル化の外部委託を積極的に行い、館蔵品データベースの充実を図った。 ・原板フィルムの劣化を防ぐため、中性紙を使用した収納箱への移し替えを継続して行った。			
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 作品に応じた適切な保管に資するため、保管用資材を充実させ、保存環境の整備を進めるとともに、寄託品の所在確認を実施した。寄託者に安心して寄託していただけの関係継続に尽力した。 また、作品画像の充実化に努め、蓄積の基盤となるシステムのリニューアルに取りかかることができたため、B評価とした。	
【中期計画記載事項】 国民共有の貴重な財産である文化財を永く次代へ伝えるため、収蔵品の管理を徹底し、特に収蔵品の増加に伴い収蔵に必要な施設設備の充実、改善を図る。また、収蔵品の現状を確認の上、管理に必要なデータ(画像データ、テキストデータ等)を整備して、展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。			
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 中期計画の初年度として、デジタルデータの蓄積等、業務の基盤となるシステムのリニューアルに取り掛かることが出来たため、中期計画を順調に遂行できているといえる。4年度以降、新しいシステムを導入し、運用することで、更なる取り組みの充実化を図る。	



縹糸威胴丸 兜・大袖付

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の管理・保存・修理等 1)有形文化財の管理		
【年度計画】 ・ I-1-(1)-②-1) (4館共通) ア、イ、ウ、(奈良国立博物館) ア、イ、ウ			
担当部課	学芸部	事業責任者	学芸部長 吉澤 悟
【実績・成果】 (4館共通) ア 収蔵庫を拡充する検討を行った。 イ 寄託者情報の更新や預証書の更新に伴い、寄託品の所在確認を行った。 ウ 収蔵品等の新規デジタル撮影を実施した。新規にデジタル撮影した画像は、3,059件である。 (奈良国立博物館) ア 収蔵品データベースについて、新規追加や既存情報の修正などを行い、情報の充実を図った。 イ 画像データベースの個別データを追加更新した。画像データベースに追加登録したデータは、3,778件である。 ウ ・ 収蔵品写真等の既存フィルムのデジタル化を実施した。既存フィルムをデジタル化した件数は、3,059件である。 ・ 既存フィルムをデジタル化したデータは、これまでDVDでの納品としていたが、3年度よりBlu-rayディスクへの書き込みに変更し、省スペース化を図った。			
【補足事項】 ・ 過去にフィルム写真しか撮られていない館蔵品については、最新の保存状態を記録するため、またウェブ公開にも供するため、積極的に新規のデジタル撮影を実施している。			
			
<p>新規デジタル撮影の一例 (4月16日撮影) 収蔵品番号 1165 法華経巻第七 (平成7年に館蔵品登録されて25年以上経つが、カラー写真撮影は今回が初めてとなった)</p>			
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 収蔵品情報の整備を継続して実施することができた。 画像データの蓄積と登録は、定量的には例年並みであり、年度計画に沿って着実に実施できた。		
【中期計画記載事項】 国民共有の貴重な財産である文化財を永く次代へ伝えるため、収蔵品の管理を徹底し、特に収蔵品の増加に伴い収蔵に必要な施設設備の充実、改善を図る。また、収蔵品の現状を確認の上、管理に必要なデータ(画像データ、テキストデータ等)を整備して、展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。			
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画の初年度として、収蔵品情報の更新に積極的に取り組んでおり、収蔵品のデジタル写真撮影、既存フィルムのデジタル化とも着実に実施し、収蔵品の管理に必要なデータ整備という中期計画に向けて順調に推移している。上記の通り画像データは日々更新しているが、新規撮影やデジタル化によって増加する件数はそれを上回り、整理が追いつかない現状があるため、今後は作業体制の強化と効率化の必要がある。		


中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の管理・保存・修理等 1) 有形文化財の管理		
【年度計画】			
・ I-1-(1)-②-1) (4館共通) ア、イ、ウ、(九州国立博物館) ア、イ			
担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長 原田あゆみ
【実績・成果】			
(4館共通)			
ア 収蔵施設設備の充実、改善に向けた検討			
<ul style="list-style-type: none"> 施設設備に関して、収蔵庫内の扉の点検を実施した。開閉時に電気鍵にエラーが出る頻度の高い扉については、施工業者に依頼し、調整作業を行った。また、収蔵庫内空調機器についても点検を実施した。照明器具の一部についてLEDに変更した。 収蔵庫のセキュリティの向上を図るため、監視カメラの位置調整及び機器の点検を実施した。 収蔵庫内の保管スペースを確保するため、文化財保管用の棚を増設した。 			
イ 寄託品等の所在確認作業			
<ul style="list-style-type: none"> 当館は所蔵品以外にも借用品(約1,400件)、寄託品(約1,300件)など数多くの作品を管理している。元年度からの3年間計画となる収蔵品の実査(棚卸し)を継続し、全工程を完了した。 収蔵品実査の一環として、合計約14,000点からなる対馬宗家文書の目録情報及び画像データとの対応関係を精査し、確認を完了した。 寄託品を含む約7,500件の収蔵品等の所在確認作業を行い、収蔵場所の情報を更新した。 実査を行った収蔵品の状態や付属品等を記録・撮影し、文化財情報システム上での共有を進めた。 収蔵庫内のスペースを有効に活用するため、一部文化財の保管場所を変更し、新たに収蔵された文化財の保管スペースを確保した。 			
ウ 専任撮影技師による2,146件(カット)の収蔵品・出品作品等の新規撮影、及び関連データを整備した。(九州国立博物館)			
ア 文化財情報システムの運用を継続し、605件の文化財データを新規登録した。			
イ 列品・寄託品・借用品などの有形文化財情報と、陳列・画像・修復などの情報を一元管理するシステムを継続的に運用し、また、同システムの改修・整備を進めた。			
【補足事項】			
		棚卸し作業の様子	
【年度計画に対する総合評価】 評定：A		【判定根拠、課題と対応】 年度計画どおり、収蔵庫の点検を実施し、収蔵庫内の扉や照明などに対し、必要に応じた整備や修理及び調整を行った。また、収蔵品の棚卸しを継続して実施した。 3年度は、来館者による展示品の撮影可否情報を収蔵品データベースに明示し、確認できるようにした。これにより、撮影可否を確認する事務作業から展示室での表記まで、情報の共有をシームレスに行うことができた。特に、件数が多く入れ替えの頻度が高い借用品において、ヒューマンエラーの防止に大きく寄与したことからA評定とする。	
【中期計画記載事項】 国民共有の貴重な財産である文化財を永く次代へ伝えるため、収蔵品の管理を徹底し、特に収蔵品の増加に伴い収蔵に必要な施設設備の充実、改善を図る。また、収蔵品の現状を確認の上、管理に必要なデータ(画像データ、テキストデータ等)を整備して、展示・調査研究等の業務に活かし、博物館活動を充実させる。			
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 新たに受入を予定している資料について、保管スペースの確保に努めた。また、2年度に引き続き、収蔵庫内の棚卸しを実施し、資料登録情報の更新を行うとともに、保管方法の現状確認と適切な保管方法について検討し、中期計画を順調に遂行している。今後も収蔵品の適切な管理を行う。	

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の管理・保存・修理等 2) 有形文化財の保存		
【年度計画】 ・ I-1-(1)-②-2) (4館共通) ア、イ、ウ (東京国立博物館) ア、イ、ウ			
担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長 富坂賢
【実績・成果】 (4館共通) ア 収蔵庫等44か所を対象に生物生息調査の実施及び、全館的に害虫防除のための防虫薬剤設置を実施した。また、生物生息調査結果等から改善を要すると判断した収蔵庫1か所、修理室5か所に対して除塵防黴清掃を実施した。 イ 収蔵品を中心に、保存カルテを247件作成した。 ウ 収蔵庫及び展示室274か所の温湿度を計測し、それらの解析から、収蔵環境の特性評価を行った。収蔵庫及び展示室の温湿度、空気汚染物質に関する年次報告を整備した。感染症拡大防止対策に関連し、修理施設の換気と収容人数の最適化について検証した。 (東京国立博物館) ア シミュレーション技術を用いて、屏風の地震動に対する応答挙動を観測する手法について検証した。 イ 5か所の収蔵庫、修理室に対して各7種の空気汚染物質濃度を計測し、データの解析・蓄積を行った。 ウ 法隆寺金堂壁画を奈良国立博物館から輸送するにあたり、経路選定、振動計測、作業工程の最適化について総合的に検証した。			
【補足事項】			
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 館内保存環境の現状把握のために、生物生息、温湿度、地震対策、空気環境に関する調査と、脆弱な文化財の輸送に関する調査研究を実施した。また、感染症拡大防止対策について修理施設の換気と環境維持の両立に関するデータをとりまとめた。 以上の実績から、年度計画を遂行できたと評価した。		
【中期計画記載事項】 適切な展示・保存環境の保持のため、収蔵・展示施設の温湿度、生物生息、空気汚染及び地震等への対策、並びに保存等に関する調査研究とそのデータの解析・蓄積を引き続き実施する。			
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 従来から課題としていた、より高度な地震対策の実現については、3年度にその検証手法を開発し、その効果を検証することができた。文化財輸送環境の保全については、壁画という脆弱な文化財の輸送に際して、走行経路の選定、輸送機関上の振動計測から輸送作業工程の評価に至るまで一貫した調査研究を実施した。温湿度計測及び生物生息調査の結果から館内各所の環境的評価に基づく対策を講じることができた。 以上の観点から、中期計画の初年度として順調に事業を開始できたと評価した。		

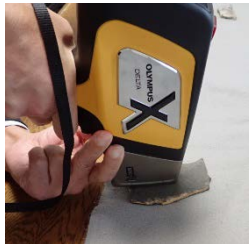


修理室の除塵防黴清掃

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(1)有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の管理・保存・修理等 2)有形文化財の保存		
【年度計画】 ・ I-1-(1)-②-2) (4館共通) ア、イ、ウ (京都国立博物館) ア、イ、ウ			
担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長 羽田聡 保存科学室長 降幡順子
【実績・成果】 (4館共通) ア 館内外の保存科学担当者をはじめとする関係者との連携を強化し、IPMの徹底を図った。 イ 収蔵品の保存カルテを191件作成した。 ウ 平成知新館及び明治古都館、収蔵庫等の保存環境に関わる情報収集及びデータ解析を行った。 (京都国立博物館) ア 平成知新館の地震対策として、建物基礎部と床免震部に振動計9台を設置し、建物と床免震装置の振動調査を実施した。床免震装置が作動する震度4以上の揺れは無いが、得られたデータの解析から、一部の床免震部で展示替えに伴う可能性のある微動が検出されたため、より詳細な解析のためのデータ収集を継続している。 イ 明治古都館(本館)の北エリアは、発掘調査・空調工事が実施されていたため、3年度は南エリアについて、通年で温湿度調査及び歩行性昆虫類生息調査を実施し、データの蓄積を行った。明治古都館北エリア工事による汚損等の影響を減らすIPMの一環として清掃作業を実施し、今後の清掃方法について検討した。 ウ 東収蔵庫は、新館モニタリングシステムとの一体的な運用を実施した。即時的に温度・湿度が分かる環境モニタリングシステムを有効活用し保管環境データの解析・蓄積を図った。一方、専用LANが使用できない北倉・資料棟・文化財保存修理所エリアでは、定期的に温湿度に関するデータ収集を行い、速やかに修理者協議会や現地施設管理者との打ち合わせ時に周知することにより、保管環境等の意識向上と連携強化を図った。また、通年で展示室及び各収蔵庫の歩行性昆虫類の生息調査、定期的な空気質調査を実施し、データの蓄積を図った。			
【補足事項】  床免震部に設置した振動計			
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 主として文化財貸与に伴う点検時に、保存状態の確認と共有のため行っている収蔵品の保存カルテ蓄積を継続して行い、191件作成した。 適切な展示・保管環境の保持の取り組みとともに、地震等への対策として、平成知新館の振動調査を開始し、床免震部と建物基礎部に分けてデータ収集を図ることができた。建造物が震度2以上の揺れを観測した場合、振動を記録する条件設定をしたが、3年度での計測は幸いにもなかった。開館時における振動頻度や、来館者由来と考えられる振動等についても検討するため、設定条件の変更も検討していきたい。展示・収蔵施設の温湿度環境モニタリング・空気質調査・昆虫類生息調査等の継続的な実施とデータ蓄積を行い、データ解析を基にして、他部署との連携を図りながら適切な展示・保管環境維持に迅速な対応ができた。		
【中期計画記載事項】 適切な展示・保管環境の保持のため、収蔵・展示施設の温湿度、生物生息、空気汚染及び地震等への対策、並びに保存等に関する調査研究とそのデータの解析・蓄積を引き続き実施する。			
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 展示・収蔵施設の温湿度管理は、敷地内の建物6棟についてモニタリング及び歩行性昆虫類の生息調査を通年で実施し、データの蓄積を図るとともに、それらの解析結果を受けて、より適切な展示・保管環境の保持に向けて建物毎の対応策を検討することができた。今後も継続してモニタリング活動を進めるとともに、他館との情報交換などを実施し、より適切な環境保持に対する調査研究に繋げていきたい。収蔵施設は、空調システムが各々異なる等、複数条件で運用されているため、継続的なモニタリングの実施とデータの蓄積、データ収集の迅速化を図るためのシステム再構築について検討を始めている。		

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(1)有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の管理・保存・修理等 2)有形文化財の保存		
【年度計画】			
・ I-1-(1)-②-2) (4館共通) ア、イ、ウ、(奈良国立博物館) ア			
担当部課	学芸部	事業責任者	保存修理指導室長 荒木臣紀
【実績・成果】			
(4館共通)			
ア 例年通り、文化財害虫の生息状況を把握するため、展示室、収蔵庫、調査室、トラックヤードなどに昆虫調査用トラップを設置し、2か月に1回の頻度で学芸部研究員がローテーションを組んで交換を行った。調査会社からの調査結果を蓄積し分析することでIPM(総合的有害生物管理)を推進し、清掃することで被害の低減に努めた。また、こまめな清掃と防塵マット交換を定期的を実施し、展示室、収蔵庫、調査室、トラックヤードといった文化財周辺の衛生環境保持に努めた。			
イ 国内の博物館、寺社から貸し出しの依頼があった作品について、梱包前、開梱後に調査を行い、調書の拡充を行った。			
ウ 無線式温湿度センサーで展示室や展示ケースについては24時間のモニタリングを実施した。取得蓄積した温湿度データから、展覧会ごとに情報を整理し、展示室内の環境管理、改善に役立てた。収蔵庫についても温湿度データロガーでデータを収集し、環境の把握を行った。月に1度、デジタル温湿度計を用いてモニタリングと温湿度データの回収を行い、館内環境ワーキンググループでデータを共有して空調の調整に役立てた。			
(奈良国立博物館)			
ア 宮内庁正倉院事務所と協力して正倉院展終了後に、展示ケース内の敷板、卦算などから塵埃を採取し、電子顕微鏡にて観察した。電子顕微鏡の画像からケースの気密性に対する評価を行い、適切な気密性を整えるために修理や部材交換などのメンテナンスの計画を作成した。			
【補足事項】			
(4館共通)			
ウ			
・学芸部保存修理指導室員並びに総務課環境整備係員等により構成される、「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」を月に1回程度開催し、実施しデータを共有することで展示保存環境に関する問題点や改善案について協議を重ねた。			
(1)展示室内温湿度調査：97か所			
(2)展示ケース内ほか粉塵調査：25か所			
(3)文化財虫害生息状況調査：100か所			
・「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」：8回開催			
			
写真1. 仏像館に設置した新しい形式のデータロガー（中央）の様子			
【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】		
評定：B	継続した調査の実施やデータの蓄積を着実にやっている。また、調査で得られた結果を蓄積するだけでなく、分かり易いデータ解析結果の表現を模索しつつ円滑な監視体制の整備を行い、保存環境の維持や向上を進めた。なら仏像館についてもデータロガーの形式を新しくして、館全体での展示保存環境の保持と改善を図った。 館内環境維持のため今後も継続して調査と解析を進めデータの蓄積を図りたい。		
【中期計画記載事項】			
適切な展示・保存環境の保持のため、収蔵・展示施設の温湿度、生物生息、空気汚染及び地震等への対策、並びに保存等に関する調査研究とそのデータの解析・蓄積を引き続き実施する。			
【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】		
評定：B	学芸部研究員が東新館、西新館の展示室や収蔵庫で温湿度並びに文化財害虫に関するモニタリングや調査を年間通じてやっている。なら仏像館も東西新館同様にデータの蓄積と解析を着実に実施しており、これを継続することで目標に近づいている。		

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(1)有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の管理・保存・修理等 2)有形文化財の保存		
【年度計画】			
・ I-1-(1)-②-2) (4館共通) ア、イ、ウ、(九州国立博物館) ア			
担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長 木川りか
【実績・成果】			
(4館共通)			
ア 3年度は、IPMの考え方に基づき、館内各エリアの温湿度管理、粘着トラップによるモニタリング及び清掃を徹底し、必要に応じて有害生物処理20件を実施した。			
イ 所蔵品の保存カルテ83件を作成した。			
ウ 2年度に引き続き、文化財の展示・保存空間における揮発性有機化合物濃度を測定し、より良い展示・保存環境を作り出すための各種手法を検討した。			
(九州国立博物館)			
ア 展示室、収蔵庫等の温湿度データを連続計測し、蓄積したデータを展示・収蔵環境の保全に活用できるようにした。また、粘着トラップを館内全域に設置し、毎月交換・観察することで、昆虫の侵入、棲息状況を把握した。これにより、文化財害虫被害に早期に対応することができた。また、館内に搬入される文化財及び資材の生物処理を行うことで、収蔵品等への生物被害を未然に防ぐことができた。			
【補足事項】			
<ul style="list-style-type: none"> ・展示・収蔵空間等にデータロガーを設置し、測定結果をモニタリングすることで、作品の材質に合わせた温湿度環境を維持した。 ・館内全域において、粘着トラップの定期的な観察・交換による捕獲虫モニタリングと、各エリアにつき年2回程度の徹底清掃の実施により、害虫の発生要因を低減させた。また、館内職員・事業者向けにIPM研修を開催し、対策の重要性を周知させた。 ・2年度に引き続き、文化財害虫を館内に持ち込まないために、搬入される文化財及び資材に対し、低酸素濃度処理、二酸化炭素処理、低温処理等の化学薬剤を使用しない生物処理を実施した。 ・展示ケースの効率的な換気方法の検討や、展示台の新規作製時に活用するための、揮発性物質が放散しにくい材料の選定などを行うことで、より良い展示環境作りに資した。 			
			
自動ドアの害虫侵入防止対策の様子		二酸化炭素による生物処理の様子	
			
館内（機械スペース）の徹底清掃の様子			
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】	
評価：B		IPMの徹底を図るため、館内の温湿度、捕獲虫、空気質等の保存環境に関するデータを連続的・継続的に蓄積した。また、取得したデータに基づいて環境の改善に取り組むことができ、収蔵品等への生物被害を未然に防ぐことができた。	
【中期計画記載事項】			
適切な展示・保存環境の保持のため、収蔵・展示施設の温湿度、生物生息、空気汚染及び地震等への対策、並びに保存等に関する調査研究とそのデータの解析・蓄積を引き続き実施する。			
【中期計画に対する評価】		【判定根拠、課題と対応】	
評価：B		収蔵品・展示品等の保存環境に関わるデータ収集を継続し、そのデータを関係者で定期的に細やかに確認し、適宜必要な対応を実施した。初年度として、文化財の適切な保存環境を保持することができており、中期計画を順調に遂行できている。	

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管・次代への継承 ②有形文化財の管理・保存・修理等 3) 有形文化財の修理 3)-1計画的な修理及びデータの蓄積 3)-2科学的な技術を取り入れた修理							
【年度計画】								
<ul style="list-style-type: none"> ・ I-1-(1)-②-3)-1 (4館共通) ア、イ、(東京国立博物館) ア ・ I-1-(1)-②-3)-2 (4館共通) ア、(東京国立博物館) ア 								
担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長 富坂賢					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・ 保存修復課の修理技術者を中心に、館内で館蔵品の本格修理、応急(対症)修理を行った。作品の劣化予防のために219件の応急修理に着手し、53件の本格修理を実施した。 ・ データベース構築のために、2年度に修理が完了した16件の修理内容についてデジタル化を実施し、その成果をもとに『東京国立博物館文化財修理報告書22』を刊行した。 ・ 修理計画立案に向け、国宝・重要文化財を含む627件の作品に関して修理の検討を行い、中長期的修理計画策定を進め、4件の国宝・重要文化財の本格修理を実施した。 ・ ハンドヘルド蛍光X線分析装置を用いて、国宝「普賢菩薩像」の彩色材料や「灰陶甕」(後漢時代・2世紀)の材質を調査し、適切な修理に役立てた。 								
【補足事項】								
<ul style="list-style-type: none"> ・ 国宝「普賢菩薩像」(絹本着色、平安時代・12世紀)は紡ぐプロジェクトからの寄附金により修理を実施・完了した。重要文化財「九条袈裟」(絹製・羅・緋糸、元～明時代・14世紀)はバンク・オブ・アメリカからの寄附金により修理を実施・完了した。重要文化財「小袖 白綾地秋草模様(冬木小袖)」(絹製、尾形光琳筆、江戸時代・18世紀)は文化財活用センター文化財修理フェンドレイジング事業からの寄附金により修理を実施した(2年1月着工、工期24か月)。重要文化財「月次風俗図屏風」(紙本着色、室町時代・16世紀)は当課本格修理費により修理を実施・完了した。 								
								
<p>ハンドヘルド蛍光 X 線装置による調査</p>								
【評価指標】項目	3年度実績	目標値	評定	経年変化	29	30	元	2
修理件数(本格修理)	53件	-	-		69	26	24	44
修理のデータベース化件数	16件	-	-		47	98	19	13
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 緊急性の高い応急修理、計画立案のための事前調査を計画的に実施した。運営交付金による修理費が伸び悩む中、3年度は新型コロナウイルスの感染拡大による自己収入減の影響により新規の本格修理を外注することができなかった。一方で、機構内(館内)で実施することができる正倉院裂186点の修理計画を立て、そのうち25点の本格修理に着手することができた。 以上の実績から、所期の計画を遂行できたと評価した。							
【中期計画記載事項】 修理を要する収蔵品は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画の初年度として、事前調査、応急修理、本格修理の各段階で保存科学と修理技術が連携して保存修理事業にあたり、博物館活動に対して最適な作品修理を行うことができた。引き続き常駐する修理技術者を増員し、文化財の安全な活用を担保できる環境を整えたい。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管・次代への継承 (2) 有形文化財の管理・保存・修理等 3) 有形文化財の修理 3)-1 計画的な修理及びデータの蓄積 3)-2 科学的な技術を取り入れた修理							
【年度計画】 (京都国立博物館) ・ I-1-(1)-②-3)-1 (4館共通) ア、イ、(京都国立博物館) ア ・ I-1-(1)-②-3)-2 (4館共通) ア、(京都国立博物館) ア、イ								
担当部課	学芸部	事業責任者	列品管理室長 羽田聡 保存修理指導室長 大原嘉豊 保存科学室長 降幡順子					
【実績・成果】 I-1-(1)-②-3)-1 (4館共通) ア ・館藏品中、緊急性の高い、絵画4件、彫刻1件、書跡1件、金工3件の本格修理及び応急修理を行った。特に懸案であった「重要文化財 紙本墨画 雪裡三友図」の本格修理に着手することができた。 ・「重要文化財 芦雁図 伝宗湛・宗継筆」をはじめとする旧大徳寺塔頭養徳院方丈襖絵の4か年計画の2年目の修理を継続して行った。 イ 3年度は124件の新規修理文化財搬入があり、データベース化を行うとともに、過去のデータに関して1,073回追加、更新を行った。 (京都国立博物館) ア ・長期修理計画に基づき、館藏品の修理を予定通り実施する事ができた。 I-1-(1)-②-3)-2 (4館共通) ア 3年度、所蔵者の協力を得て文化財保存修理所内工房で実施した科学分析調査は、作品の構造調査として、I.Pを用いたX線透過撮影2件、X線CT撮像2件、SfMによる3次元形状調査2件である。作品の材質調査としては蛍光X線分析調査10件、分光分析調査2件、ポリライト観察1件、オルソ撮影1件を実施した。 (京都国立博物館) ア 構造調査の一例としては、X線CTを使用し、表面の塗装により修理前の観察では内部構造が不明であった彫刻作品に対して、ほぞ位置の確認や釘等の使用状況を明らかにし、解体時の適切な作業に関する情報を提供することができた。またSfMを使用し、歪みを有する板絵について、修理前後の歪みの変化量についてモニタリングを実施し、変位が無いことを客観的に示したことで、修理方法や修理指針に関して貢献することができた。 イ 非破壊的な材料調査では、各工房の調査依頼を受け入れ、絵画資料の材料調査を主に実施した。X線を使用した顔料調査では、絹本の作品において、表・裏彩色ともに調査する事例が増加するとともに、可視光・赤外線を使用した染料調査も実施した。また、これらのデータは修理及び復元事業に活用することができた。継続的に絵画資料の染料・顔料材料調査を実施し、彩色材料データの蓄積を図った。 ・保存修理所創設以来の非電子化修理報告のPDF化を進め、3年度は164件の修理記録のPDF化を行った。								
【補足事項】								
 <p>蛍光X線分析調査風景</p>				 <p>オルソ画像撮影</p>				
【定量的評価】項目	3年度実績	目標値	評価	経年 変化	29	30	元	2
修理件数(本格修理)	9件	-	-		11	17	12	12
修理のデータベース化件数	124件	-	-		180	149	171	137
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 3年度は、文化財保存修理所各工房からの修理前・後の科学的調査の依頼を受け入れ、内部構造や使用材料等の調査を行った。年度計画にある彩色材料等の分析事例の集積とともに、文化財の技術の解明にも有効なデータを得ることができた。今後も調査の継続を図るとともに成果の発信へも取り組んでいきたい。							
【中期計画記載事項】 修理を要する収蔵品は、機構の保存科学研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 3年度は中期計画の初年度として、X線CT撮影、X線透過撮影、蛍光X線分析、分光分析等の非破壊的な手法を用いた調査を実施し、修理方針の策定に役立てることができた。またSEMを用いた調査や、ポリライトを用いた観察、赤外線オルソ撮影等、分析手法の多様化も図ることができ、作品の材質に応じた科学調査を実施できた。以上から、中期計画を順調に遂行できているといえる。 今後も、修理方針の検討に有用な情報を提供できる、高い安全性や精度を有する測定装置の導入や修理技術者とのデータ・知識の共有が必要であると考え。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の管理・保存・修理等 3)有形文化財の修理 3)-1 計画的な修理及びデータの蓄積 3)-2 科学的な技術を取り入れた修理								
【年度計画】									
・ I-1-(1)-②-3)-1 (4館共通) ア、イ、(奈良国立博物館) ア、イ、ウ ・ I-1-(1)-②-3)-2 (4館共通) ア、(奈良国立博物館) ア、イ									
担当部課	学芸部	事業責任者	保存修理指導室長 荒木巨紀						
【実績・成果】									
I-1-(1)-②-3)-1 (4館共通) ア ・ 館蔵品本格修理3件のうち、新規1件、元年度からの継続事業1件、2年度からの継続事業1件を実施した。 内訳 絵画2件、彫刻1件 ・ 年度内に2件の修理が完了した。2年度からの継続事業1件は4年度も引き続き実施する計画である。 イ 『奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書』第4号を年度内に刊行した。また、修理報告資料を整理しデータベース化に努めた。 (奈良国立博物館) ア 『絹本著色十二天像』修理について、3年度は表補絹、表打ちを行うことで画面を保護した後に、旧肌裏紙の除去、旧補紙、旧補絹の除去を行い、一部については電子線劣化絹を用いて欠失分を補った。 イ 22年度に策定した館蔵品の長期修理計画に基づき、館蔵品修理を計画通りに実施した。 ウ 寄託者と協議を行い、寄託品3件について当館の推薦による財団からの助成を受けて修理を実施した。 I-1-(1)-②-3)-2 (奈良国立博物館) ア 京都大学生存圏研究所に依頼して3件の樹種同定を行い修理に寄与した。 イ 木彫像のX線CT調査で構造を確認して修理作業を進めた。絵画作品、彩色彫刻部分においては蛍光X線分析を行って技法の解明を進め、修理方針決定に寄与することができた。									
【補足事項】									
ア 収蔵品等の修理を目的とした募金箱について、従来の設置場所以外に特集展示「新たに修理された文化財」の期間中、展示会場に設置した。 イ 2年度に修理の完了した文化財を掲載した『奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書』第4号を刊行した。彫刻の材質調査や銘文集成などを掲載して、修理実績や内容を広く伝えることができた。 (奈良国立博物館) ウ 寄託品修理として、当館関係費により本格2件及び応急1件の修理を行った。									
【定量的評価】項目		3年度実績	目標値	評価	経年変化	29	30	元	2
修理件数(本格修理)		3件	-	-	変化	6	6	8	7
修理のデータベース化件数		55件	-	-		69	63	74	70
【年度計画に対する総合評価】			【判定根拠、課題と対応】						
評価：B			継続事業による修理のほか、新規事業による修理にも着工でき、計画的に修理が実施できている。また、本格修理及びデータベース化の件数は、予定通り進行した。						
【中期計画記載事項】									
修理を要する収蔵品は、機構の保存科学研究者と機構内外の修理技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備を更新し充実を図る。									
【中期計画に対する評価】			【判定根拠、課題と対応】						
評価：B			財団助成や寄附金、募金等を活用し、緊急性の高いものから順次修理を実施することができた。また、当館保存修理指導室員と文化財保存修理所の修理技術者が連携し、X線CTやX線透過撮影、蛍光X線分析などを実施し、結果を共に検討することで得た情報を適切な修理の基礎資料とできたことから、中期計画を着実に遂行している。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の管理・保存・修理等 3) 有形文化財の修理 3)-1 計画的な修理及びデータの蓄積 3)-2 科学的な技術を取り入れた修理							
【年度計画】								
<ul style="list-style-type: none"> ・ I-1-(1)-②-3)-1 (4館共通) ア、イ、(九州国立博物館)ア ・ I-1-(1)-②-3)-2 (4館共通) ア、(九州国立博物館)ア 								
担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長 木川りか					
【実績・成果】								
<ul style="list-style-type: none"> ・ I-1-(1)-②-3)-1 (4館共通) <p>ア 館蔵品を中心に損傷状況や展示計画等を勘察し、優先順位の高い文化財17件について本格修理を実施した。また、損傷が軽微な文化財6件について応急修理を実施した。</p> <p>イ 将来のデータベース化を視野に入れ、未整理であった23～24年度分の修理報告書を取り纏めた。 (九州国立博物館)</p> <p>ア 毎年修理を行っている重要文化財「対馬宗家関係資料」については、1件(3巻)の本格修理を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ I-1-(1)-②-3)-2 (4館共通) <p>ア 重要文化財「対馬宗家関係資料」等の紙を素材とする文化財10件の本格修理に伴い、本紙剥落片を利用して紙質調査を行い、補修紙作成に役立てるとともに、作品の新たな学術情報として記録した。 (九州国立博物館)</p> <p>ア 釈迦三尊図の顔料分析など5件の科学調査を行い、修理方針の策定等に役立てた。</p>								
【補足事項】								
(4館共通)								
ア								
<ul style="list-style-type: none"> ・ 館費による修理件数は23件(本格17件、応急6件) ・ 内訳：絵画4件(本格2件、応急2件)、書跡4件(本格4件)、金工1件(本格1件)、刀剣2件(本格2件)、考古6件(本格3件、応急3件)、民族資料2件(本格2件)、歴史資料4件(本格3件、応急1件)。 (九州国立博物館) <p>ア 釈迦三尊図の顔料分析については、修理中にしか実見することができない裏彩色について、実体顕微鏡観察と蛍光X線分析による科学分析を行った。結果は、白色は鉛白、赤色は辰砂、緑色は緑青、青色は群青の使用が想定され、絵画製作当初の典型的な顔料の使用状況であることが判明した。</p>								
								
釈迦三尊図の調査風景								
【定量的評価】								
項目	3年度実績	目標値	評価	経年 変化	29	30	元	2
修理件数(本格修理)	17件	-	-		19	40	31	20
修理のデータベース化件数	-	-	-		-	-	-	-
【年度計画に対する総合評価】				【判定根拠、課題と対応】				
評価：B				本格修理は以前より、大型化する傾向にあり、2年度以前に比べると件数は減少傾向にある。年度計画を念頭に、作品の状態に合わせて本格修理や応急修理を適切に行うことができた。				
【中期計画記載事項】								
修理を要する収蔵品は、機構の保存科学的研究員と機構内外の修復技術担当者の連携のもと、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。また、修理に必要な調査研究のための基本設備の充実を図る。								
【中期計画に対する評価】				【判定根拠、課題と対応】				
評価：B				伝統的な修理技術に科学調査の成果を取り入れながら、計画的かつ正確に修理を実施し、中期計画を順調に遂行できている。				

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の管理・保存・修理等 4) 文化財修理施設等の運営		
【年度計画】 ・ I-1-(1)-②-4) (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館)ア、イ			
担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	課長 阿部勝 保存修理指導室長 大原嘉豊
【実績・成果】 (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館) ア ・ 文化財保存修理所の整備・充実のため、定期的に工房との修理者協議会を開催（年7回）し、意見交換を行った。 イ ・ 文化財保存修理所運営委員会を開催し、修理所の運営について審議した。 ・ 老朽化した各所の設備（修理所3階エレベーター、旧管理棟1階の北西部と別棟を結ぶ渡り廊下）の修繕を行った。 ・ 豪雨時の地下階への雨水流入を防ぐため、地下階の電気室扉、修理準備室1入口及びドライエリアに面する外部扉に止水板を設置した。 ・ 防災体制の充実を図るために実施している文化財保存修理所での防災訓練を、新型コロナウイルスの影響により延期した。			
			
設置した止水板			
【補足事項】 (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館) イ 新型コロナウイルスの影響により、文化財保存修理所運営委員会は書面開催とした。			
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 2年度に続き新型コロナウイルスの影響により、文化財保存修理所運営委員会は書面開催という形になったが予定通り開催し、委員から意見を運営の参考とした。修理者協議会は感染症対策を実施の上、予定通り開催し、特に新型コロナウイルスの影響下における環境について意見交換を行うことができた。また老朽設備の改善を適時適切に行うことができた。以上から、年度計画に掲げる「文化財保存修理所の整備・充実」を実施できたといえる。		
【中期計画記載事項】 文化財保存修理所等については、国と協力して整備充実を図る。			
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 豪雨時の雨漏り、3階エレベーターの故障等、設備面での老朽化は目立つものの、豪雨時の地下階への雨水の侵入を防ぐ止水板を設置する等の整備・修繕を実施し、指定品を中心とした修理事業を安全に行う施設としての役割を果たすことができた。中期計画の初年度として、防災訓練や減災に向けた方策を講じ、工房と協力しながら文化財保存修理所の整備を進めることができた。		

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の管理・保存・修理等 4) 文化財修理施設等の運営		
【年度計画】 ・ I-1-(1)-②-4) (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館) ア、イ			
担当部課	学芸部	事業責任者	保存修理指導室長 荒木臣紀
【実績・成果】 (奈良国立博物館) ア 文化財保存修理所の大型ブラインドについては改修を文化財保存修理所協議会で検討を行った。また、修理所外側の雨水対策、ドレインの清掃を行った。 イ ・ 例年5月に行っていた文化財保存修理所運営委員会を新型コロナウイルス感染防止の観点から8月に書面審議にて開催し、4年3月11日にも対面とリモートを併用したハイブリット形式にて実施した。また、各工房における修理事業の実施状況、修理所施設の維持・管理、工房内の温湿度をはじめとする保存環境の改善に関する課題などについて、修理に従事する公益財団法人美術院、株式会社文化財保存、北村工房の3工房代表者と当館学芸部で討議する文化財保存修理所協議会を2回開催した(9月24日、4年3月3日)。 ・ 館長以下博物館職員が定期的に文化財保存修理所各工房の修理実施状況を視察する修理所巡回を4回実施した。			
【補足事項】 ・ 4年3月1日から4年3月27日まで、当館西新館第1室において特集展示「新たに修理された文化財」を開催した。これまでに文化財保存修理所各工房などで修理が完了した10件の当館収蔵品・寄託品と修理解説パネルを使ってマスコミ媒体と広く連携して、文化財修理活動を広く一般に理解してもらう機会とした。 ・ 文化財保存修理所の施設や事業の概要を紹介する案内パンフレットを修理所公開などの機会に配布した。 ・ 12月16日に文化財保存修理所特別公開を開催し、修理の取り組みや修理所各工房の活動を広く知ってもらう機会とした。新型コロナウイルス感染防止のため、参加者を3回に分けて実施し、報道機関を含む78名の参加があった。			
			
写真1. 特集展示「新たに修理された文化財」			
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 文化財保存修理所運営委員会を4年3月11日に対面とリモートを併用したハイブリット形式で行い、所内3工房代表者とは9月22日と4年3月3日に協議会を開催し、修理の実施状況の確認及び作業環境、保存環境の改善について協議するなど、情報の共有に努め、文化財保存修理所を円滑に運営することができた。また、文化財防災センターと連携して文化財被災時への助言について、修理技術者と意見交換を行った。		
【中期計画記載事項】 文化財保存修理所等については、国と協力して整備充実を図る。			
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画初年度として、文化財保存修理所を円滑に運用するとともに、蛍光X線分析やX線CTによる科学技術の修理への積極的な活用を行い、保存修理を実施することができた。コロナ禍のため、2年度と同様に一般への公開などに制限を設けざるをえなかったが、事業を着実に実行しており、中期計画を遂行している。		

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承 ②有形文化財の管理・保存・修理等 4) 文化財修理施設等の運営		
【年度計画】 ・ I-1-(1)-②-4) (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館) ア、イ			
担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長 木川りか
【実績・成果】 (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館) ア ・ 修理文化財を保管する修復収蔵庫について、照明のLED化の工事を行った。 ・ 絵図等の大型装演文化財の修理に用いる乗り板について、さらなる大型品に対応できるよう、安全に脱着可能な延長部材を製作した。 イ ・ 当館文化財保存修復施設にて館経費による本格修理14件及び所有者等負担による修理37件、合計51件の修理事業を実施した。その他、館外で館経費による3件の修理事業を実施した。 ・ 修復施設4(彫刻)については、彫刻及び装演分野の修理で使用した。			
【補足事項】 (京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館) ア 蛍光灯の生産終了を受け、紫外線カット仕様の照明のLED化を実施した。 イ ・ 文化財保存修復施設4は彫刻等の大型文化財の修理のためのものであるが、九州では彫刻の指定品が少なく、修理技術者は常駐していない。3年度は、装演分野の修理で活用した。 ・ 文化財の修理は在宅勤務が不可能であるため、時差出勤、時差休憩、分散勤務など、新型コロナウイルス対策の指針を遵守しながら効率的、計画的に修理を実施した。 ・ 文化財保存修復施設で本格修理した文化財51件中48点、9割強が九州山口地区所在文化財となっており、九州山口地区における文化財修理の拠点として確実に実績を蓄積している。修理文化財の中には、熊本県の球磨川水害による被災文化財が含まれている。			
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 新型コロナウイルス対策の指針を順守しながら、文化財保存修復施設を積極的に活用した。これにより、文化財の保存修理を適切に行うことができ、九州山口地区における文化財修理の拠点として、着実に成果を上げることができた。		
【中期計画記載事項】 文化財保存修理所等については、国と協力して整備充実を図る。			
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 修復収蔵庫において、必要な施設・環境の整備を実施したことにより、現時点では中期計画を順調に遂行できている。 しかし、開館より16年がたち、集塵機・ミュージアムクリーナー等の部品の生産終了や経年劣化により、抜本的な修理やメンテナンスが必要な状況に近づきつつある。今後も、必要な整備を行いつつ、メンテナンスも継続的に行うことで、文化財を安全かつ適切に修理できる設備を維持していくことで、中期計画の円滑な遂行に努める。		



修復収蔵庫のLED化工事